

先日、友人から「ある方から写真を預かっている」とメールをいただきました。なんと70年前の家族写真で、セピア色でした。裏には「吉川様へ 昭和22年11月1日 於 五所川原」とあり、私と弟の名前が母の文字で記してありました。懐かしさが迫ってきました。吉川さんは青山学院神学部女子部出身で、母の後輩で、お名前だけは存じていました。戦争中に父は横浜の教会の牧師をし、私たちは牧師館に住んでいましたが、吉川さんも横浜に住んでおられ、母に親切にして下さったのです。

私たち母子は五所川原に疎開して行きましたが、父は横浜大空襲を生き延びました。戦後に横浜の教会を辞し、家族揃って暮らし始めた頃の写真です。父親っ子の私は父の膝に座り、オシャマに手を揃えて気取っています。甘えん坊の弟は手を伸ばして母に掴まっています。そして、みんなが揃っているのが嬉しくてたまらないという表情です。両親の子どもで、本当に幸せでした。この写真が母の友人の吉川さんの手元に渡り、70年間も大切に保存されていたとは驚きました。



それから20数年後に、下谷教会の月報に母は「地上では旅人」と題して、戦時下と戦後の生活を記しました。その中に記された吉川さんの名前を鮮明に覚えています。

一週間（横浜大空襲）過ぎて突然、夫が帰ってきた。髭はのび、汗と塵にまみれ、罹災した信徒一人一人の安否を確かめて、死臭の漂う焦土を歩き続けた人の姿がそこにあった。一瞬の裡に八千人の命が奪われたその日、午前十時の空が真暗になり、焼夷弾の雨あられと降ってきた。教会から隣接の牧師館に行った時は、もう火の手があがって盛に燃えていた。その中から、ヘブル語とギリシャ語の聖書と辞典を書斎から持ち出した以外は一切のものを灰にってしまった、と言いながら、肩にかけていた小さな救急袋から取り出したのは、この前、吉川夫人から私に下さったと便りにあった銘仙の反物であった。（「みどりの塔」 62号より）

吉川さんは「横浜港南台教会の牧師の妻は私の友人の娘だから」と言われて、教会を捜しておられた彼女の友人に港南台教会を紹介されたそうです。それは20年以上前のことでしょうか、そして、吉川さんの友人にこの写真を下さったとのこと。吉川さんは高齢になられ、引っ越されて行ったそうです。牧師としては働かれなかったけれども、教会の中で、聖書研究会を開いて、聖書を教え、伝道されていたとお聞きました。今、御存命だったら100歳位でしょうか。吉川さんの友人は何度か、港南台教会に見えましたので、私は彼女を覚えておりました。彼女は港南台教会に行くには、バスの乗り換えが2度になり、時間のロスがあるとのこと、断念され、別の教会へ行っておられます。でも、この写真を持っていて下さったのです。吉川さんにお会いできなかったのは残念ですが、温かい思いがずっと流れていることを感じて嬉しくなりました。

それと共に、青山学院はもともとは、メソジストの神学校を母体として誕生した学校であり、多くの牧師や婦人伝道師を輩出し、日本でのキリスト教伝道に大きな働きをした学校であることを、改めて思い返しました。信仰を共にする仲間として、吉川さんは母を助けてくださり、友情をいつまでも大切に下さり、私にまで彼女の思いは伝わったと思いました。